

令和 6 年 6 月 6 日現在

機関番号：12605

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K13023

研究課題名(和文)バスク語の非定形副詞節の認知・機能言語学的研究

研究課題名(英文)A study of non-finite adverbial clauses in Basque from a cognitive and functional perspective

研究代表者

石塚 政行(Ishizuka, Masayuki)

東京農工大学・工学(系)研究科(研究院)・講師

研究者番号：50838539

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文):本研究の成果として、バスク語フランス方言の(1)小節、(2)行為副詞、(3)副動詞節および動名詞節の特徴が明らかになった。

(1)小節とは、主語および補語からなる節であり、副詞節および補文節になる。小節の主語・補語が主節の主語と所有関係を持つ場合、副詞節や補文節として機能する。さらに、日本語の二重主語構文と比較し、所有コピュラ文の機能を明らかにした。(2)行為副詞は、行為の様態などを表す副詞であり、独自の項構造を持つ。これにより、行為副詞が単なる様態の副詞とは異なることが示された。(3)バスク語の副動詞・動名詞節について、どのような意味を表現できるかが明らかになり、新たな調査の方向性を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義として、バスク語フランス方言の文法的特徴を詳細に解明することで、言語学における文法理論の発展に寄与した。また、日本語の二重主語構文との比較研究を通じて、言語間の類似性と相違点を明らかにし、言語普遍性への理解を深めた。社会的意義として、バスク語という少数言語の文法的特徴を明らかにすることで、言語の多様性とその保存の重要性を示した。それにより、言語文化の維持と振興への寄与も期待される。

研究成果の概要(英文):The results of this study revealed the characteristics of (1) small clauses, (2) action adverbs, and (3) converbs and gerundives in French Basque.

(1) A small clause consists of a subject and a complement, and can function as either an adverbial clause or a complement clause. When the subject or complement of the small clause has a possessive relationship with the subject of the main clause, it functions as an adverbial or complement clause. Furthermore, by comparing it with Japanese double-subject constructions, the function of possessive copular sentences was clarified. (2) Action adverbs express the manner of actions and possess a unique argument structure. This demonstrated that action adverbs are different from simple adverbs of manner. (3) Regarding converbs and gerundives in Basque, it was clarified what meanings they can express, indicating new directions for further research.

研究分野：言語学

キーワード：バスク語 副詞節 意味論 統語論 言語類型論

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

伝統的に、動詞の活用形には定形と非定形があると考えられてきた。たとえば、(1a) の am/are/is は定形、(1b) の be は非定形である。

(1) a. {I am/you are/she is} the president. b. I persuaded her to be the president.

定形と非定形はおもに 2 つの点で区別される。

- [i] 定形の動詞には時制や主語との一致の情報が含まれるが、非定形の動詞には含まれない。(1a) の am/are/is はどれも現在時制で、主語の I/you/she に応じて形を変えている。いっぽう、(1b) の be は現在か過去かの情報は含まれず、主語が何であっても形を変えない。
- [ii] 定形の動詞は独立した節になれる。(1a) の am/are/is は、他の動詞に頼ることなく独立した節を構成している。それに対して、(1b) の be は、別の動詞 persuade を述語とする節の一部となっている。

しかし、Nikolaeva (2007) にまとめられている様々な言語の分析からも明らかなように、定形と非定形は常にはっきりと区別できるわけではない。たとえば、日本語のテ形は、時制や主語との一致の情報は含まないが、(2) のように独立性の高い節を形成できる。このような例は、[i] の観点からは非定形だが、[ii] の点では定形のような特徴を持っており、はっきりどちらかに分類できない。

(2) 太郎は昨日大阪へ行って、花子は今日大阪から帰って来る

このため、非定形の動詞が独立した節を形成するのはどのような場合か、その背後にある意味的・文法的メカニズムはどういったものが一般言語学的な問題となっている。

2. 研究の目的

本研究は、バスク語の非定形副詞節が持つ多様な意味・機能と、節として独立性の程度が、どのように関連しているかを明らかにする。それを通じて、非定形節が節としての独立性を持つのはどのような場合か、その背後にある意味的・文法的メカニズムは何かという問題に答えるための新たなデータを提供する。

バスク語の非定形節の独立性に関する研究は少なくとも 2 つの点で不十分であった。第 1 に、Hualde & Ortiz de Urbina (2003) にまとめられているような従来のバスク語研究では、節は独立か独立でないかのどちらかであるものと想定されており、節の独立性はいくつかのパラメーターが関わる段階的なものであるという、認知・機能言語学を中心に近年定着しつつある見方からの研究がほとんどなかった。第 2 に、非定形節のなかでも、「～しながら」「～するために」といった副詞的な意味を表す節(副詞節)は周辺的な現象としてあまり顧みられることがなく、意味・機能が詳しく記述されることがなかった。そこで、本研究では、バスク語の非定形のさまざまなタイプの副詞節について、意味・機能の広がり詳しく記述し、複数の観点からどの程度の独立性を持つかを明らかにする。それによって、副詞節の多様な意味・機能と、節の独立性のあいだの相関を解明することを目指す。

3. 研究の方法

本研究は、フランス側のバスク語方言話者への聞き取り調査と、同方言で書かれた小説・新聞記事を元にした文献調査に基づく。

[1] 先行研究で存在が明らかになっているそれぞれの非定形副詞節の用例を文献調査によって集め、意味・機能によって用法を分類する。聞き取り調査を通じて、意味・機能の記述と用法の分類の妥当性を検証し、修正する。

[2] 分類したそれぞれの用法について、次の 3 つの観点から節としての独立性を検討する。

[I] 独自の主語を持ちうるか

[II] 独自の文法要素(時制、アスペクト、否定など)を持ちうるか

[III] 等位接続的特徴(語順の制約など)があるか

これらの性質を持っていればいるほど、独立性が高いと見なす。

[3] 意味・機能と節の独立性の対応関係を分析し、その関係の背後にある意味的・文法的メカニズムを考察する。

4. 研究成果

本研究の成果として、バスク語フランス方言の(1)小節,(2)行為副詞,(3)副動詞節および動名詞節の独立性と、文法的振る舞いが明らかになった。

(1)小節とは、主語名詞句およびコピュラ補語からなる節的まとまりのことである。本研究は、(a)小節が副詞節および補文節になること、(b)小節主語または小節補語が主節の主語と所有関係を持つこと、(c)どちらが所有関係を持つかによって、副詞節になるか補文節になるかが制限されていることを明らかにし、さらに(d)日本語二重主語構文と比較することで、小節が補文となる所有コピュラ文の機能を記述した。

(1a)小節は以下のように副詞節となる。[eskuak hutsik]が小節、eskuakがその主語、hutsikがその補語である。この小節は、gizonak heldu dira「男たちは来た」に対して副詞節として働いている。

Gizonak [eskuak hutsik] heldu dira.
男 手 空の 来た 助動詞
「男たちは手ぶら (=手が空) で来た」

また、小節は以下のように所有動詞の補文節となる。この構文を「所有コピュラ文」と呼ぶ。小節の主語は、所有動詞の目的語としても機能している。直訳すると、「男たちは、手を空の状態で見ている」となる。

Gizonek [eskuak hutsik] dituzte.
男 手 空の 持っている
「男たちは手ぶら (=手が空) だ」

(1b)小節が用いられる場合、主節の主語は、小節の主語または補語に対して所有関係を持っている。例えば、上の例では、主節主語「男」と小節主語「手」の間に「男の手」という所有関係がある。次の例では、主節主語「男」と小節補語「好きなもの」の間に「男の好きなもの」という所有関係がある。

Gizonak [gatua maite] du.
男 猫 好きなもの 持っている
「男はその猫が好きだ (=猫を好きなものとして持っている)」

(1c)小節が副詞節として用いられるのは、小節主語が主節主語と所有関係を持ち、かつ小節が表す事態が「手が空である」のような一時的状態を表す場合である。

小節が補文節になるのは、主節主語が小節のどちらの句と所有関係を持つかによらない。また、小節が表す事態の一時性にもよらない。例えば、上例「男はその猫が好きだ」は、小節補語と主節主語が所有関係を持ち、恒常的属性を表している。

(1d)所有コピュラ文は、日本語二重主語文と比較できる。日本語二重主語文は「XはYがZだ」のような構文で、XおよびYが主語の性質を示す。「YがZ」の部分があるバスク語の小節に当たり、「XのY」(主節主語と小節主語)または「XのZ」(主節主語と小節補語)の間に所有関係が成立する。

日本語二重主語文では、「XのY」型は小節「YがZ」が指定文(主語に属性Zを帰する文)であり、「YのZ」型は小節「YがZ」が指定文(Zが何であるかを主語で指定する文)であるという、一対一の関係が見られる。しかし、バスク語所有コピュラ文には、「XのY」型でかつ小節が指定文であるものがある(e.g.「男はその猫が好きだ」)。このことから、所有関係と指定・指定の区別には原理的な対応はないことが明らかになった。

(2)行為副詞は、lasterka「走って」のように、行為の様態または同時的行為を表す副詞である。本研究は、(a)行為副詞が独自の項構造を持つこと、(b)行為副詞は単なる様態の副詞とは異なることを明らかにし、その述語的・節的性質を示した。

(2a)行為副詞は独自の項を取る。例えば、以下の例のbidetik「道を」は、lasterkaがなければ非文法的となるため、lasterkaの項と言える。

bidetik lasterka ari da.

道を 走って する 助動詞
「彼は道を走っている」

*bidetik ari da.

(2b) 行為副詞は fite「急いで」のような様態の副詞とは異なる。これは, hasi「始める」や ikusi「見る」のような動詞の補文述語となるかからわかる。行為副詞は補文述語となれるが, 単なる様態の副詞はなれず, 主節述語を修飾する解釈になる。

lasterka hasi da.
走って 始めた 助動詞
「彼は走り始めた」

fite hasi da.
急いで 始めた 助動詞
「彼は急いで(何かを)始めた(*急ぐことを始めた)」

(3) バスク語の副動詞および動名詞節について, 類型論的な副動詞の意味を表現できるかどうかを明らかにした。結果は以下の表の通りである。これによって, それぞれの形式がどの範囲で重なりあっているかがわかり, どのような違いを調査すべきかが明確になった。

	定形節	-tuz	-turik	-tzean	-tzearekin	その他
Simultaneity		*		OK		
Anteriority			*			-tu ondoan, -tu ondotik
Posteriority						-tu aintzin
Manner		OK		*		副詞
Cause	-lakotz	OK	OK			-tzeagatik
Reason	bait- -lakotz	OK	OK			-tuagatik, -tzeagatik
Explanation	-nez	*	*	*	*	
Real cond.	ba-	*	*	*	*	-tuz geroz
Hyp. cond.	ba-	*	*	*	*	-tuz geroz
Unreal cond.	ba-	*	OK/*	*	OK/*	-tuz geroz
Pot. circm.	balekibale ba-	*/OK	*	*	*	
Concession	-n arren, nahiz eta - n	*	+ere /*	*	*	nahiz eta -tu
Concs. cnd.	ba- ere	*	+ere /*	*	*	nahiz eta -tu
Result	*	*	*	*	*	等位節
Purpose	-n	*	*	*	*	-tzeko
Means		OK	OK	*	*	

Addition	*	*	*	*	*	-tzeaz bestalde, nahiz eta -tu, -tuagatik
その他			Ettxerat sarturik hobeki niz.			

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 石塚政行	4. 巻 36
2. 論文標題 変則的二項述語文としての所有文：バスク語の所有コピュラ文	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本エドワード・サビア協会研究年報	6. 最初と最後の頁 27-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 石塚政行
2. 発表標題 バスク語の動詞 <i>ari</i> 「する」と共起する副詞は補語か修飾語か
3. 学会等名 日本言語学会第164回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 浅岡健志朗, 石塚政行, 松田俊介
2. 発表標題 グロス実践における問題点とその背景にある言語観
3. 学会等名 日本言語学会第165回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 石塚政行
2. 発表標題 移動類型論における主要部とバスク語の行為副詞
3. 学会等名 日本言語学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 石塚政行
2. 発表標題 バスク語の所有コピュラ文と二重主語文
3. 学会等名 日本エドワード・サビア協会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 石塚政行
2. 発表標題 移動類型論における主要部とバスク語の行為副詞
3. 学会等名 日本言語学会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関